

**立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）**  
**大学院生研究**  
**2006年度研究成果報告書**

<b>研究科名</b>	立教大学大学院			文学 研究科	比較文明学 専攻
<b>指導教員</b>	所属・職名		氏 名		
	文学研究科・教授		佐々木 一也 印		
<b>自然・人文の別</b>	自然	・ <input type="checkbox"/> 人文	<b>個人・共同の別</b>	<input type="checkbox"/> 個人	・ 共同 名
<b>研究課題名</b>	台湾日本語文芸の研究——俳句を中心に				
<b>研究代表者</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科・比較文明学専攻・博士後期課程・4年		今井 祥子 印		
<b>研究組織</b>	在籍研究科・専攻・学年		氏 名		
	文学研究科・比較文明学専攻・博士後期課程・4年		今井 祥子		
<b>研究期間</b>	2006 年度				
<b>研究経費</b>	200 千円				

**研究の概要** (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、台湾において営まれた日本語文芸について、日本統治期にしぼり、俳句を中心にして調査、考察を行ったものである。具体的には、当時の台湾俳壇のなかで最も存在感をみせた俳句結社、ゆうかり社（台北、1921年～、ホトトギス派）に着目し、その1930年代の活動を主にみていった。本研究課題にかんする先行研究は多くない。また関係史資料の収集・閲覧は日本国内では難しく、台湾現地調査の実施が必須かつ基本作業とされた。

**キーワード** (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ 台湾 ] [ 日本語文芸 ] [ 俳句 ]

## 研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究課題の先行研究は管見のかぎり非常に限られている状況にあるが、以下において関係事項への言及がみられる。

島田謹二、1995年6月、『華麗島文学志——日本詩人の台湾体験』、東京：明治書院  
 阿部誠文、1996年3月、「海外俳句史ノオト」、『俳句研究』63-3、東京：富士見書房  
 阿部誠文、2000年1月～、「連載台湾俳句史(1)～」、『燕巢』、大阪：馬酔木燕巢会  
 宮下京子、2000年4月、「台湾の俳句——日本の一地方としての台湾」、『朱夏』14、東京：せらび書房

筑紫磐井、2000年6月、「歳時記の百年(6)『臺灣歳時記』」、『俳壇』17-7、東京：本阿弥書店

中島利郎、2006年2月、「日本統治期台湾文学研究——「台湾文芸家協会」の成立と『文芸台湾』西川満「南方の烽火」から——」、『岐阜聖徳学園大学紀要外国語学部編』45、岐阜：岐阜聖徳学園大学

これらによってもなお、台湾俳壇の具体的状況およびゆうかり社(註)の活動の実際について知りえないところがあった。加えてまた、日本統治下の台湾において刊行され、島内で流通していた本研究課題に関する雑誌・書籍等の収集・閲覧は今日日本国内においては困難な状況にある。このような状況を踏まえ、本研究では、海外(台湾)調査を実施した。国立台湾大学図書館、国立政治大学図書館、国立中央図書館台湾分館、国家図書館、中央研究院図書館等を利用しながら、日本統治期の台湾における日本語文芸活動にかかわるもの、なかでも、ゆうかり社が発行する刊行物、ならびに、ゆうかり社を率いやがて台湾俳句界全体を代表するようになっていった山本孕江(本名：山本昇、1893年高知生まれ、1914年渡台)にかんする記述等の収集・閲覧につとめた。以下はそのうちの一部である。

## ゆうかり社刊行物

『ゆうかり』(俳誌／機関誌・月刊)、1921年10月～1945年4月〔通巻281号〕

『台湾俳句集(ゆうかり叢書第一編)』、1928年7月、三上武夫編〔3400句〕

『ゆうかり俳句集(ゆうかり叢書第二編)』、1935年、山本孕江・三上惜字塔編〔9400句〕

『山本孕江句集』、1942年11月、山本昇著〔646句〕〔序文：高浜虚子〕

## その他

『台湾歳時記』、1910年、小林里平編、東京：政教社

『花蓮港俳句集』、1939年、渡邊美鳥女編、花蓮港：うしお吟社

『みどり句集』、1940年、渡邊美鳥・渡邊義孝編、花蓮港：うしお吟社

『台湾時報』(新聞)、『台湾教育』(雑誌)、『台湾公論』(雑誌)

これらの史資料からよみとれたことは、既存の近代俳句史や文芸史にはほとんど書き込まれていない。台湾社会においても存在の影は極めて薄いといえる。

\*

1930年代のゆうかり社において顕著なのは「台湾俳句」をめぐる一連の動きといえよう。

大正後期の1921年に俳誌『ゆうかり』を創刊したことに始まるゆうかり社の活動は、内地俳壇(中央俳壇)との連絡をもちつつも、専ら「別天地」台湾という〈場〉にその性格を形成してきたといえる。1930年代、ゆうかり社は台湾俳句界にあっては多数派となっており、ゆうかり社内では「台湾俳句」なるものの追究が活発化

## 研究成果の概要 つづき

していた。そして山本孕江を中心にして「五七五十七音定型俳句に依り臺灣本来の姿を把握」し、「臺灣俳句の完成、独立、自治」を目指すという立場を固めてゆく。「嘗て内地に於て経験した季感を全然振り捨てて、臺灣の季感に即する所謂臺灣俳句としての純粹無垢の立場を自覚すれば、そこに本當の意味の臺灣句が生れる譯である」という主張は、その認知を求めて〈場〉の外へもむかってゆく。

当時ホトトギス社は、拡大しゆく日本国の外縁、俳句世界の周縁に位置する結社・俳人も例外とすることなくその影響力を発揮しており、ゆうかり社の面々にとっても、ホトトギス社を率いる高浜虚子は頂点であり、規範そのものであった。

1936年6月6日、その高浜虚子が台湾に初めて降り立つ。それはフランスからの帰路、船が給油のために基隆に数時間ほど寄港しなければならないためという他律的な訪台であった。ゆうかり社の面々はこれを千載一遇の機とし「虚子先生」とその俳句観＝規範をめぐって交渉を行う。いかなる地であろうと俳句の領土は「日本」であるとすする虚子に、孕江は「台湾俳句」の自治を主張した。このときのことを虚子は次のように書いている。「…、其時間を利用して臺北迄行つて臺灣神社に参詣して間も無く基隆に帰るといふ忙しさであつた。が、其往復の自動車のなかで孕江君が私の「熱帯季題論」に反対して、臺灣にも四季は厳存してをる、…。吾等は別に臺灣の歳時記を作つてそれに依つて臺灣の俳句を確立しなければならぬ。と云ふやうな事を極めて熱心に、今自動車は何處を驅けりつゝあるか、車上には何人が乗って居るか、といふことも殆ど忘れ去つてしまつたかと思ふくらゐに熱心に其事を話すのであつた」(『山本孕江句集』序文より)。

しかしながら、この交渉において虚子の態度——「日本本土に興つた俳句はどこ迄も本土を基準として、本土に生れた歳時記を基準として、其の歳時記は動かすべからざる尊厳なるものとして、熱帯の如きは一括して「夏」の季に概當すべきものである。さうでない、内地の季題に混乱を来して収拾すべからざるものになる」(前掲に同じ)——もまた頑なものであった。

移民でありまた植民者である孕江らにとって、「日本」、「台湾」とはどのような関係図を描くものとしてあつたのか。内地・外地、本国・植民地という切込み線は日本国というものの非対称性や非均質性、ずれをあらわにする。が他方で、そこにおいて構築される分節化・帰属の欲望をはらむ「日本」、「台湾」という言説は、それぞれに本来性というものをその支えにおく。守る／取り戻す／発見すべき本来性とは、守る／取り戻す／発見するという当の(言語)行為によって成る遂行的産物ともいえる。

\*

台湾日本語文芸にかんする研究は緒に就いたばかりであり、先述したように先行研究も多くない。検討すべき事項が残されている。今後、本研究の成果を踏まえさらに詳細な検討を行つてゆきたい。また日本統治期以後についても考察の対象とし、研究をより進めていきたい。

(註) ゆうかり社は、1921(大正10)年に日本統治下の台湾・台北で結成され、植民台湾において最も長く存続し、最も規模を大きくした俳句結社である。但し「本島人」(被植民者)のかかわりは稀で、「内地人」(植民者)を主にした。外地の俳句界において、ホトトギス派として活動しながらも「台湾俳句」「台湾季語」といった独自の立場、俳句観をうちだし、それを「自治」という主張にまで展開させていった例は多くみられない。俳誌『ゆうかり』(機関誌・月刊)は、結成時より1945(昭和20)年4月(通巻281号)まで継続刊行されているが、その後の活動状況、存続の有無については現在のところ不明である。

**研究発表** (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

本研究「台湾日本語文芸の研究——俳句を中心に」は、現在、作成中である博士論文の重要な一部分を構成するものとなる。

本報告書では詳しく述べるができなかった事柄にかんしても、個々に詳細な考察・分析をおこない、論文としてまとめ、投稿したいと考えている (国外を含む)。